SASAKI Care & Communication Vol.49 September 2019 お問い合わせ・ご意見:『C&C』事務局 細谷俊寛
FAX 0120-566-052　http://www.sasaki-kk.co.jp
発行:ササキ株式会社　東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F
●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。

2019. September Vol.49

C&C

Care Communication

ケア&コミュニケーション

DENTAL REPORT

全身管理下での歯科治療が
必要な患者も受け入れながら
地域の1.5次医療機関としての
役目を果たす

征矢歯科医院 副院長
征矢 学 先生

征矢歯科医院 院長
征矢 亘 先生

P01-06

INSIDE REPORT

北の大地から、
理想の成功を追求し、
国際標準を見据えた
歯科医療を提供する

いのうえ歯科医院 理事長
井上 裕之 先生

P07-12

THE FRONT LINE

マイクロスコープを常用し
レーザーの
根管治療も
重視する都市型医院

文京瀧田歯科医院 院長
瀧田 稔弥 先生

P13-16

DOCTOR'S TALK

1人30分の
診療ルールを厳守し、
多忙なビジネスパーソンから
厚い信頼を得る

徳永歯科医院 院長
徳永 哲也 先生

P17-19

SASAKI
http://www.sasaki-kk.co.jp

「全身麻酔器」を備えた診療室

全身麻酔を必要とする治療では、麻酔管理を学副院長が担当し、口腔内の治療は亘院長が担当している

全身管理下での歯科治療が必要な患者も受け入れながら地域の1.5次医療機関としての役目を果たす

茨城県日立市の「征矢歯科医院」は長年、予防歯科に力を入れてきた。3年前から無痛治療を導入し、1.5次医療機関としての役割も担っている。予防と全身管理型の歯科医院として、その歩みと今後について伺ってみた。

征矢歯科医院 副院長 征矢 学 先生
院長 征矢 亘 先生

征矢 学 副院長　征矢 亘 院長

父や恩師、先輩たちから受け継いだ地域医療への思い

「征矢歯科医院」が開業したのは1985年。インタビューをお願いした征矢学副院長の父、征矢亘院長が「地域に寄り添う歯科医院を」との思いを胸に開院した。

亘院長が重視したのは、歯周病治療と予防だ。当時は、虫歯を削って詰める、かぶせるの治療が主流の時代。しかし、亘院長は「口の健康を長期的に維持する」ことにこだわり、患者の口腔衛生に対する意識を変えていった。

そんな父の姿を見て育った学副院長が歯科医師を目指したのは、自然な流れだった。大学時代に目指していたのは、矯正歯科医だ。子どもの頃に受けた矯正治療で苦労した思い出があったからだ。

ところが、研修医時代、勤務先の歯科医院で出会った歯科麻酔科医が、学副院長の将来を変えることになった。大学病院以外でも歯科麻酔科医が活躍する場があること、一般の臨床現場で全身管理が必要とされる時代になっていることに気づかされたのだ。

東京歯科大学大学院で歯科麻酔学講座を専攻した学副院長は、師事した一戸達也教授の言葉にも感銘を受けることになった。

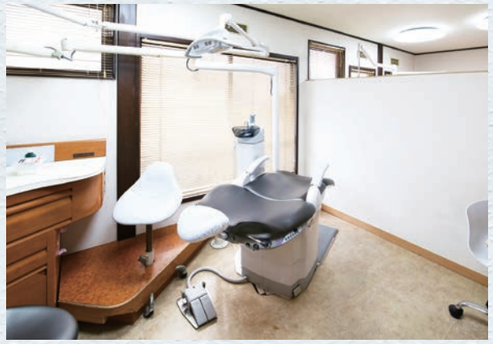
「麻酔では患者さんを治すことはできない。歯科治療の技術も身につけ、必要とされる歯科麻酔科医になりなさいと一戸教授から教えていただいたのです」

その言葉を励みに歯科麻酔と治療技術の研鑽に努めた学副院長は、大学院修了後、週1～2回の征矢歯科医院の勤務と並行し、フリーランスの歯科麻酔科医として全国から麻酔業務を依頼されることになった。そこで見たのは、大学病院クラスの設備が整っていない地域では、歯科麻酔科医による全身管理下での治療を受けることが難しく、患者が遠方まで行かなければならない現実だった。そして、同様の現象は、征矢歯科医院がある日立市でも起きていた。

学副院長は、「時間や費用の制約から通院が難しく、歯科治療を諦めざるを得ない状況をなんとか改善したい」という一心から、亘院長と相談し、征矢歯科医院の診療内容に無痛治療を加えた。

そして、3年前から静脈内鎮静法による無痛治療を開始。昨年からは、日帰りで可能な全身麻酔も導入した。これまで約150名の患者が、全身管理下での歯科治療を

ユニットのそばに「生体情報モニタ」を設置した状態。院内には「AED」も完備している


チェアはパーテーションで区切っている

P01のチェアを一般診療用に使う場合のセッティング

歯科医院は横長の平屋建て

受けたという。

全身管理を必要とする患者が潜在的に数多く存在

征矢歯科医院では、どのような患者が無痛治療を受けているのだろう。

行われている無痛治療のうち、「静脈内鎮静法」は、点滴により鎮静薬を静脈に投与して麻酔を行う方法だ。静脈内鎮静には痛み止めの効果はないため、口腔内への局所麻酔は必須となる。

適応になるのは、軽度の歯科恐怖症や異常絞扼反射（嘔吐反射）を持つ患者、全身的既往を持ち、通常の歯科治療ではリスクのある患者、障害を持つ患者になる。

もう1つの「日帰り全身麻酔」の場合は、完全に意識のない状態で治療できるため、1回で多くの治療が可能になり、通院回数が少なくなるメリットがある。征矢歯科医院では、適応の基準を大学病院等よりも厳しく設定し、全身的既往のない重度の異常絞扼反射の患者、静脈内鎮静法では管理が不可能な障害のある患者を対象にしている。

無痛治療を始めた当初、学副院長は高齢者の適応が多いのではないかと考えていたが、予想以上に歯科恐怖症の患者が相談に訪れることに驚いた。

「異常絞扼反射を持つ患者さんのなかには、通院を諦め、25年も治療を受けていない方がいました。また、恐怖心が強く、待合室で号泣してしまい、診療室に入室できない成人の方もいます。通常の歯科治療を受けることが難しい患者さんは、世界中どの地域にも存在し、日本では400～500万人いる計算になります。通院ができないため、歯科医師は気づきにくいのですが、それほど多くの困っている患者さんが存在していることは知っておいたほうがいいと思うのです」

無痛麻酔を必要とする患者は、長期に渡り、歯科治療を受けていないことが多い。そのため、虫歯や歯周病が重症化し、一般歯科の治療として難しいケースも珍しくない。

しかし、征矢歯科医院には、治療経験が豊富なベテラン歯科医師の亘院長がいる。難しい症例では、亘院長と学副院長が十分に検討した上で、治療に当たる。とくに安全管理が厳しい全身麻酔の場合は、麻酔管理を学副院長が、口腔内の治療や手術は亘院長が担当しているという。

「役割を分担することで、お互いを尊重し合い、安全で快適な歯科治療が目指せていると思います」と学副院長は話す。

他の歯科麻酔医や歯科医院との連携も深める

今、学副院長が課題としているのは、地域の歯科医院や総合病院との連携をどう深めていくか、ということだ。

現在、茨城県内に歯科麻酔専門医・認定医は数名しかいない。そのため、学副院長は北茨城市民病院で全身麻酔を、茨城県歯科医師会が開設した「口腔

待合室には自然光がやわらかく注ぐ

広々とゆったりした受付

応接室のような雰囲気の待合室

センター土浦」で障害者歯科治療を担当している。

「大学病院などが近隣にない地域の無痛治療に対する必要性は、未知数です。しかし、潜在的に困っていらっしゃる患者さんがいることは事実です。患者さんが涙ながらに訴える姿を目の当たりにすると、『本当に苦労されてきたのだな』と痛感します」

学副院長は、そうした患者に対し、複数回のコンサルテーションを行い、治療風景の写真やイラストを用いて治療の流れ、メリットとデメリットを十分に説明し、理解してもらった上で同意書を作成している。

こうした経験から、全身管理型歯科医院の重要性を、茨城県内はもちろん、全国的に広め、スタンダードな形にしていく必要性があると語る。

そして、その一環として力を入れているのが、歯科麻酔科医の臨床的なスタディグループ「CDAC(シーダック)」の運営だ。

歯科麻酔科医は大学の医局を離れると、個人での活動になり、専門医や認定医をどう活用していくべきか、悩むことも多かった。

そこで、出身大学に関わらないネットワークを構築し、組織を離れたあとの麻酔歯科医のプラットホームとして創設された。学副院長は理事を務め、現在は全国から35名が参加している。

「CDAC」は、歯科麻酔科医の研鑽の場だけでなく、一般歯科医師向けの実践的歯科麻酔学の講演を行ったり、一般開業医と歯科麻酔科医との医療連携のプラットホームとして機能しつつある。

「患者さんが悩みを直接、相談できて、地域の歯科麻酔科医とコンタクトができるようなプラットホーム作りも進めているところです」

全身管理型の歯科医院が標準になる時代を目指す

征矢歯科医院では理念の一つに「すべての方に治療を受けていただく」ことを掲げている。亘院長が長年、地域住民の歯を守ってきたが、学副院長が加わったことで、受け入れられる患者の幅が広がることになった。

ユニットのそばに「生体情報モニタ」を設置したことも、その変化の1つだ。学副院長は「これからの歯科医院には必須の機器」と語る。

高齢者や循環器系疾患を有する患者では生体情報モニタを用いて血圧の変動を考慮した治療を進めます。また、緊張が強い患者は血管迷走神経反射を引き起こす可能性があるために、あらかじめ生体情報モニタを装着し、緊急時にはすぐに対応が取れる体制を整えます。

それだけでなく、征矢歯科医院では、歯科衛生士を始め、ほとんどのスタッフが「BLS(一次救命処置)」の資格を持ち、「生体情報モニタ」の正しい装着方法を含め、日頃から緊急時に対するトレーニングを積んでいる。さらに、「ACLS(二次救命処置)」の資格を持つ学副院長がいることで、より高度な救命処置にも対応できる体制が整っている。

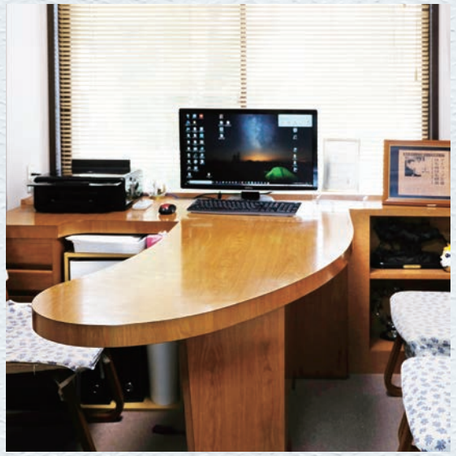
その結果、大学病院や総合病院の高次医療機関と一般の歯科医院との間をつなぐ、1.5次医療機関としての役割も担うようになってきているのだ。

そして、その役割をより高いレベルで果たすため、来年には隣地に移転新築する計画もある。

「新しい施設では、院長が大切にしてきた予防管理型に加え、全身管理型も合わせ持つハイブリッドな歯科医院にすることを考えています」

具体的には、診療室に全身麻酔による治療がしやすいスペースを確保し、ユニットもプライバシーが確保できる個室を設けること、リカバリー室の新設などを計画している。

ソフト面では、医科も含め各専門医との医療連携やマンパワーの確保、歯科衛生士の歯科麻酔学会認定の資格取得、地域内での講演活動の充実化などが目標だ。


落ち着きのあるカウンセリングスペース

「全身管理型歯科医院は、これからますます必要とされる存在になります。征矢歯科医院を充実させるとともに、全国で活躍されている歯科麻酔の先生方やこれから歯科麻酔の世界を目指したい後輩を結びつけていきたい。全身管理型歯科医院がスタンダードになることで、歯科受診が困難な患者さんを1人でも少なくしたいと思っています」

征矢亘院長(前列左)と学副院長(前列右)、スタッフのみなさん

PROFILE

征矢 学 先生

●2009年　日本大学松戸歯学部卒業　●2010年　日本大学松戸歯学部付属病院臨床研修医。東京歯科大学大学院歯学研究科歯科麻酔学専攻　●2014年　歯学博士取得。東京大学医学部附属病院　麻酔科・痛みセンター特任臨床医　●2015年　東京歯科大学歯科麻酔学講座 助教　●2017年　東京歯科大学歯科麻酔学講座非常勤講師　●北茨城市民病院歯科口腔外科　歯科麻酔非常勤医師　●茨城県歯科医師会「口腔センター土浦」非常勤歯科医師　●CDAC理事　●日本歯科麻酔学会　歯科麻酔専門医・認定医　●日本障害者歯科学会認定医

征矢歯科医院　住所:茨城県日立市弁天町2-11-8　TEL:0294-24-0648　HP:http://soyadent.com/